① 毎月1回25日発行　第3種郵便物認可（昭和35年7月26日）

山と博物館

第18巻 第11号　1973年11月25日　大町山岳博物館

北ア新雪（鳴沢岳）　撮影 千葉彬司

オオハクチョウと山博

11月3日、木崎湖に1羽のオオハクチョウが飛来した。

最初にオオハクチョウが、北アの麓の仁科三湖に姿を見せたのは、昭和24年1月17日のことである。27羽の群は静かに青木湖に白い姿を浮かべていたのであるが、やがて現われた猟師の一斉射撃で3羽が射ち落されてしまい、他は北の空のいずこともなく姿を消していった。

後日譚として、とび去った中の1羽が射ち落されたつれあいのオスを探し求めて飛んでいるうち、空腹と疲労のため、ついに力つきて、川原に舞いおりたところを保護された。

そのハクチョウを博物館がゆずり受け、その後11年間にわたって、駅前の水禽舎で飼育され、市民をはじめ訪れる旅人の心を楽しませてきた。

そして、探し求めても会えなかったオスに奇しくも剝製となって標本室でめぐり会えたのである。

高橋秀男氏は、「信濃大町の白鳥物語」（山と博物館第5巻5・6号）の中で次のように書いている。

――オオハクチョウにはじまり、各種北アルプス産の動物が逐次飼育される運びとなり、当時の博物館建設運動とあいまって、付属動動園が開設されることになった。実に博物館建設の親であり、大町へ文化の風を送りこんだ使いであったといえよう――

その後、オオハクチョウは、山博創立10周年、禁猟区設定の年、地財法適用で博物館廃止論が議会でたたかわされた際の昭和36年、また創立20周年、禁猟区設定10周年の昭和46年に三たび飛来している。

山博にとって、何かひとつの転機を迎えた時、記念すべき年、あるいは進路を切り開かなければならないような時にその姿をみせているように思えてしかたがない。

今、山博の県立移管論が何か折あるごとに話題となり、賛否両論がたたかわされている。そして今、1羽のオオハクチョウが木崎湖に美しい姿を浮かべている。（千葉彬司）

ふるさとの野仏

――白馬・小谷地方を中心として――

田中欣一

街道と石仏と

旧街道を歩くことは、もうそれ自体楽しいことであるが、沿道に昔の面影を残すところがあれば、それに越したことはない。幸い「塩の道」として知られる千国街道（糸魚川街道）は、俗化の波にさらされながらも、残光を至るところに留めている。

街道と石仏ほど、見事な取り合わせはない。実際、街道を歩きつつ、石仏に会うことほど楽しいことはない。路傍に石仏のない千国街道なんて考えられないし、例えば、青木湖西岸から佐野坂の旧街道を歩く楽しみは、風景もさることながら、点々と置かれた三十三番観音に出合うことによって、旅情を味わうことができると言えよう。

石仏の宝庫

松本から糸魚川までの千国街道を歩いて思うことの一つに、西海ノ口（大町市平）を過ぎる辺りから、めっきり石仏が多くなることがあげられる。とりわけ白馬・小谷地方に入ると、単独であるいは群をなして石仏が至るところに見られる。白馬・小谷地方は、民俗や民間信仰や植物の宝庫であるばかりでなく、石仏の宝庫でもあるわけだ。

一体どの位の石仏があるのだろうか。正確な調査はなされていないので、はっきりした数字は分らないが文字碑まで加えると、一万体を超える数字であろうと思う。それは、驚くべき数字だと言えるかも知れない。あの山深くして貧しく冷涼なる地方に――。白馬・小谷地方の人口は、約三千世帯一万三千人であるから、そこに住む人の数程に、石仏があるという勘定になる。

石仏の種類は豊富であるが、一、二を除くと特に珍しいものはない。馬頭観音・大日如来・庚申塔・二十三夜塔・道祖神・三十三番観音・徳本上人名号碑・大黒天・法華千部供養塔・百番供養塔・不動明王・百八十八番供養塔・三界万霊等・弥勒菩薩像・念仏供養塔（各種）地蔵菩薩像等々の類いである。

不喰供養塔（小谷村中土葛草蓮）

不喰供養塔

珍しいものを一つあげよう。碑在地は小谷村中土の最奥の葛草蓮（くんぞうれ）部落である。中谷川の谷から見上げるようなところで、典型的な過疎の地だ。これは文字碑であるから、石仏とはいい難いが、馬頭観音や供養塔の群れの中に建てられている。これが何とも胸の痛む哀話を伝えている。

天明の飢饉の頃である。村は栃の実や葛の根を食いつくす程の危機に頻した。飢えに泣く孫のために、じいさんが自分の食を断って死んでいった。後年、成人した孫が祖父の恩愛に感謝して、みずからの手で稚拙な文字を石に彫りつけた。それが、不喰（くらわず）供養塔となったというのである。

小谷の地に念仏供養塔が、白馬やそれ以南の地にくらべて多く見られるのは、越後の浄土真宗の影響を受けているものと察せられるが、多かれ少なかれ仏にすがる素朴な信仰心の現われと見るべきであろうか。

馬頭観音

千国街道を塩や海産物や麻を運ぶには、馬や牛に頼らねばならなかった。農耕用に飼育したことはいうまでもない。それはむしろ、人間と馬や牛とによる共同生活といってもよく、牛馬の埋葬も懇ろに行なわれたのであった。この地に馬頭観音や大日如来が極めて多いのも容易にうなづかれる。牛方何某と刻んで立派な観音像を祀ったものなども見かけるし、観音像の頭上には牛馬の頭部が彫られている。

全国各地の石仏行脚の人たちが、白馬小谷地方の石仏の中では、馬頭観音像に最も心ひかれるものがあるといったが、分るような気がする。決して繊細さや豊麗さはないが、稚拙な彫りの中に、牛馬への深い愛情がにじみでているというのである。

馬頭観音は、路傍にあるばかりでなく、屋敷内や田の畦や畑の隅の至るところにある。その数は一万余の石仏のうち、六、七割を占めることであろう。

三十三番観音

石造で残っている三十三番観音は、白馬小谷地域に七ケ所ある。南から見ていくと、青木湖西岸から佐野坂にかけて三十三体（うち一体は台座を残すのみ）。白馬村三日市場の真相寺跡に三十三体。白馬村切久保の観音原に、坂東三十三体、西国三十三体、秩父三十四体。小谷村松沢に十四体。小谷村親の原前山に八十五体。小谷村千国の源長寺に三十三体がそれぞれ現存している。

佐野坂と親の原・松沢のものは、高遠石工の手によるという記録があり、何れも彫りがよく、秀れたものとして評価が高い。白馬小谷地方の石仏の代表格で、双璧をなすものと言えようか。佐野坂のものは何れも老樹の根方に点々と安置されており、散策には極めて好都合である。街道の風情も頗るよい。親の原前山のものは、八十五体を二列にして一ケ所に祀ってあるが、これもまた独特の雰囲気をかもし出している。松風がそうそうとして渡る中、前方には白馬三山が仰がれる景勝の地である。

切久保観音原の石仏群は前記百体のほかに馬頭観音等を合わせると百七十八体ある。方

西国33番観音のうち第7番（文政12年造立）青木湖西岸

形の広い芝原の周囲に行儀よく立ち並んでいる姿は圧巻で、初めて訪れる人々は思わず溜息をつく。しみじみとした語らいのできる場所であろう。

佐野坂も、前山も、観音原も石仏を祀る例として、あるいは安置の方法として、古人の智恵の深さに感心させられる。各地の石仏が徒らに路傍や草むらに転がっているが、保存継承する上で大いに参考にしなければなるまい。

道祖神

安筑の平は道祖神の宝庫として、全国的に知られるところであるが、それは白馬小谷地方にまで及んでいる。越後路に近くなると、その数はめっきり減るが、像碑・文字碑・陰陽石まで合わせると、九十余碑を数える。白馬・小谷の内訳をみると、白馬地区五十数碑、小谷地区三十数碑となっている。像碑は、握手像・祝言像合わせて二十五碑ある。

南からめぼしいものを拾ってみよう。

○佐野南村（白馬村）　祝言像。文化12年。

○佐野北村（白馬村）　北安曇郡で最古の祝言像。彫り、造型がよくほほえましい。寛政三年。

○沢渡（白馬村）　握手像。素朴で嫌味がない。寛政二年。

○内山南村（白馬村）　握手像。相当古いものと思われるが造立年不明。逸品。

○堀ノ内（白馬村）　祝言像。文化二年。ずんぐりした自然石にほどよくおさまっている。見ごたえがある。

○蕨平（白馬村）　握手像。明和四年、造立年のわかっているものでは、白馬小谷地方最古。造型は単純であるが、かえってそれが生きている。顔立が頗る美しい。

○入ノ平（白馬村）　握手像。造立年不明。村童そのままの容姿で稚気愛すべきところがある。

○菅（白馬村）　祝言像。造立年不明。彫りがなかなかにこっている。逸品。

○細野（白馬村）　握手像。造立年不明であるが、彫りの様式、風化の度合いから相当に古いものではなかろうか。

○梨平（小谷村）　祝言像。造立年不明。ふくよかさが漂う。傑作。

○宮本（小谷村）　文字碑。寛政十二年。北安最古の文字碑である。

○土倉（小谷村）　握手像。安政四年。長身痩躯の美人像。清純なういういしさが溢れている。傑作。

○黒川（小谷村）　握手像。文久一年。土倉の握手像とほぼ同型。同じ石工の手になったものと思われる。

○石坂（小谷村）　握手像。文久三年。黒川・土倉のものと同型。石工の腕前は見あげたもの。石工が誰であるかは分っていない。

なお、白馬小谷地方には、木像による道祖神祭りの風習が各地に残っている。また、最北端にある道祖神は、大網部落にあるもので文字碑。造立年は不明。

道祖神（安政4年の造立）（小谷村南小谷土倉）

徳本上人名号碑他

徳本（江戸末期の高僧。紀伊の人）の南無阿弥陀仏の名号碑は、信州一円に及んでいるが、白馬小谷地方にも七基現存する。何れも文化文政期のもので、この高名な念仏僧に深い影響を受けたものと察せられる。碑在地を一覧しておこう。

1 白馬村飯田南原墓地
2 白馬村四ツ家公民館裏
3 白馬村新田旧堂庭
4 小谷村黒川諏訪社下
5 小谷村南小谷真木
6 小谷村千国源長寺
7 小谷村土谷中通観音堂前

碑は、例の独特な書体を刻み、下部に徳本と花押（かおう）が彫られている。

念仏碑は、小谷村に多いが、単に念仏塔とあるものや融通大念仏・六斎念仏寒念仏・念仏百万辺等がある。

西国・坂東・秩父の巡礼信仰は現在からすれば、想像を遥かに超えて深かったものに違いない。百番供養塔の多いことはおびただしいものだ。

庚申塔・二十三夜塔に至っては、どんな小さな部落へ行ってもあるし、実に堂々たる彫りで、各地石仏群の中心的な存在となっているものが多い。

総体に石造文化財を考える場合、江戸中期から明治初期にかけての造立数はきわだっている。この爆発的な石仏造立の気運を促したものは何であったろうか。

単純に民衆の生活にゆとりができたからだというだけでは片付けられない。

あの封建の圧制下の中で、農民をこれほどの信仰へかり立てたものは、何であったかを考えねばなるまい。時代思潮の背景の中で。豪雪と冷涼と山深き地域の中で。

（「白馬小谷研究」主宰）

庚申塔・過疎部落の中で、カヤ屋根との取り合せが美しい（白馬村青鬼）

木崎湖にオオハクチョウ一羽飛来

十一月二日、大町市の木崎湖にオオハクチョウ一羽が飛来しました。当館では早速、地元のモーターボート組合や小中学校へ保護運動への協力を呼びかけ、湖岸三ケ所を選定して、湖面へモミガラを流し、湖底へシイナや青米を沈めるなどして餌付けを試みました。十一月六日以降、投与した餌を採っているのが確認できましたが、飛来後十日目の十一日の夕方から姿が見られなくなり、どこかへ飛び去ったものと認められました。

ネズミの話（二）野ねずみ

金森正臣

動物は直接太陽エネルギーを使うことはできないから、その食物の摂取の方法から分けると、植物から取る草食動物、それらの動物を捕食する肉食動物、両者の中間の雑食動物などになる。

植物から動物へと流れるエネルギーの流れから生物界を見ると、草食性の動物の量が最も多く、次の捕食者さらに高次の捕食者と次第に全体の量が、エネルギーの流れの先端に行くほど、量が少なくなり、ピラミッド型になることが知られている。

草食性の哺乳類は、兎目（トモク、ウサギ）、偶蹄目（グウテイモク、シカ・カモシカ・イノシシなど）などがある。これに対して、肉食性の食肉目（ショクニクモク、イタチ・テン・キツネなど）は、草食動物を捕食する動物であり、食虫目（ショクチュウモク、モグラ・トガリネズミ・カワネズミなど）は草食性の虫を食べたり、さらにその虫を捕食している虫を食べる高次の捕食者である。

ネズミの入る齧歯目（ゲッシモク）は、リスやハタネズミのような草食性の動物と、昆虫や種子などを食べる雑食性のアカネズミ・ヒメネズミ・ヤマネなどがあり、かなり複雑に分化した食物の取り方をしている。

ハタネズミの冬の巣、材料は牧草
三月に雪の下から堀り出したもの

雑食性のネズミは季節的にも変化があり、ほとんど肉食性になったり、草食性になったり変化するものが多い。

日本のネズミをこのような立場から大きく分けると、草食性のものには、ハタネズミ・スミスネズミ・ヤマネズミ、雑食性のものには、アカネズミ・ヒメネズミなどの他、特に小型のカヤネズミ・ハツカネズミが居る。

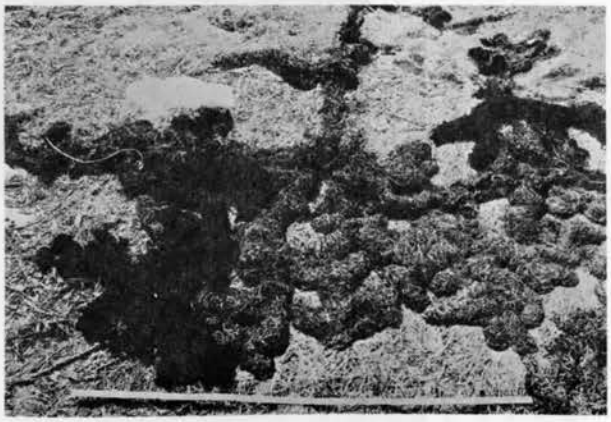
草食性の仲間は雑食性の仲間に比較して、体は太く短く、尾も短くより地中の生活に適するようになっている。消化器官も歯はよく発達し、かみ合わせ面積が広く、すりつぶすのに適しており、腸も長く、盲腸も発達し、セルロースなども消化できるようになっている。

草食性の仲間のうち、一番草食性に適応していると思われるハタネズミは九州と本州に広く分布しており、河原や土手、畑や草原に優占している。これに対して、スミスネズミやヤチネズミは亜高山の針葉樹林などに生息するのみで、その数はあまり多くないし、急激に数が増加することもない。ところが、ハタネズミは、森林の伐採後に出現する草原や火山性の草原、畑などにしばしば大発生し、農作物や植樹のカラマツなどに大害を与える。

四国にはハタネズミは生息しておらず、同じような生活場所にはスミスネズミが生活している。そして、四国のスミスネズミは、本州のハタネズミのように、畑や伐採後の草原などに、大発生し、農林害獣として注目されている。同じスミスネズミが本州と四国でこのように異なった性質を持っていることは、多分、四国のスミスネズミが本州のハタネズミのような生態的位置を獲得しているからであろう。これは四国にハタネズミが生息していないことと関係があろう。

四国にハタネズミの分布していない理由については、一つは四国が分離する前にはスミスネズミだけが分布し、分離後にハタネズミが分布して来たとする説。他の一つは、四国は暖かいので、南の方から日本に分布して来たスミスネズミがハタネズミより勢力が強く、島の分離後ハタネズミが滅亡したとする説。ハタネズミは草原に良く適応しているが、スミスネズミは、本州の亜高山針葉樹林と四国のササ草原に生息しているように、森林、草原どちらにも適応できる。草原で両種が争うとハタネズミ、森林内で争えばスミスネズミが優勢になるのではなかろうか。

四国は人間による森林の破壊以前は、常緑の林が多く、安定した森林であり、火山もないため草原はほとんどなかったであろう。河原の草原も森林が多かった時代には現在よりも少なかったであろうし、あったとしても、しばしば水を被るとあれば、何万年も種を維持することは困難であったのであろう。ハタネズミはこのような環境と競争種などから、生存が不可能になったのであろう。その後、人間による破壊の草原が出現し、スミスネズミがハタネズミのような生活に適応したのではなかろうか。



ハタネズミの雪の中の通路、古い通路は不要になると草の食べ残しや、地中の巣のために堀った土を押しこみ(黒い部分) 新しい通路を作る。雪どけ直後に撮影

一方、北海道には、ハタネズミは分布せず、ヤチネズミが本州のハタネズミと同じような生態的位置を確保し、しばしば大発生をして林業の害獣として大きな問題になっている。近縁の本州のヤチネズミが行動も敏しょうでより森林に適応しているのが観察されるのに、北海道のヤチネズミが活動性も本州のハタネズミにより似た行動をすることは興味深い。

草原にはまったく生息しない、特に森林やブッシュに適応した、ヒメネズミやアカネズミは個体群密度の調節機能が発達しているらしく、大発生するような現象はほとんど見られない。

このように草食性に適応した種がより密度の増減が激しいのに対して、森林に適応した雑食性で高栄養の食物を必要とする種は変動が少ない。原因の一つには草食性の餌は多いが、種子や昆虫に適応すると、餌全体の量が少なくなるうえ、さらに季節によっては、餌が少なくなると考えられる。

ネズミ類の生態的研究はまだ少なく、多くのことが不明のまま、原生林はほとんどなくなり、本来の生活がどんなであったのか、永久に知り得なくなってしまいつつある。

人類は、もっと自然を大切にし、自然の中から生命の生存の可能性の原則を学ぶ必要があるのではなかろうか。いかに文明や科学が発展しても、人間は一種の哺乳動物の一員であることに変わりはないのであるから。

（東京教育大学理学部
菅平高原生物実験所助手）

山と博物館第18巻第11号
一九七三年十一月二十五日発行
発行所 長野県大町市TEL②〇二一一 大町山岳博物館
印刷所 大町市下仲町 大糸タイムス印刷部
定価 年額四〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野一三、二九三）